

特別講演（要約） 作品の定義を考える ― 美術史上の論争から

東京造形大学教授 池上英洋

今日はまず修復の実例を紹介し、どこまで遡るべきかという問題に触れる。さらにパラゴネとゼウクシス伝説という両論争を加え、後者との関連でディセーニョの理念を考える。最終的にはどこまでが作品か、誰のものか、作品とは何かという問題を一緒に考えてい。

私が留学中に取材した、ボローニャ近郊カマッジョーレ村の礼拝堂の磔刑像の修復の例を見よう。村で磔刑像を洗浄した際に、眠るようなキリストの死に顔の下から目を見開いたキリストの別の顔が現れたので、12 世紀後半の制作当初の姿に戻す修復がなされた。そこでその修復が正しかったのかという問題が議論となったのである。13 世紀前半にキリストの顔つきががらりと変わる現象がイタリア全土に見られたが、原因としてはアッシジの聖フランチェスコの思想的影響があったと推測される。問題は、磔刑像を制作当初の姿に戻すことによって、13 世紀前半のキリスト像塗り替え後、その像が 20 世紀末まで長く村人の信仰の対象であり続けて来たという歴史・文化が失われてしまう点にある。同様の問題が、ルッカにあるキリスト像の修復についても起こった。修復でキリスト像をどのような姿に戻すべきかについて多種多様な意見があり、明確な解答を得ることは困難だ。美術作品をどの時点まで戻すべきかという問題は極めて難しいもので、歯切れの悪い結論しか出ないが、皆さんと一緒に考えてみたい。

美術作品は制作者によって作り出されるが、受容者の意識内で再構成される必要がある。例えばボッティチェッリの《節制》の図像的意味は 500 年前の人々にはすぐわかったが、現在の学生が理解するにはそれなりの手続きが要る。またスクロヴェーニ礼拝堂のジョットーの《絶望》などで見られるように、信者が興奮して悪魔の図像にものを投げつけたと思われる傷跡が作品に残っている場合も多い。そしてそのような傷も、やはり作品の一部なのである。トトメス三世がハトシェプスト女王の肖像を削除した「記憶の消却」も同様の例で、傷だらけの作品が美術史の一部となっている。

また、識字率が向上したルター時代には、聖書原理主義の主張が可能になった。そういった中で、プロテスタント信仰に感化された住民たちがイエス像や聖人像を焼却するという状況が起きた。作品を完全に焼かないまでも、聖人像の顔の部分だけ削るような例もあった。そのようなケースでさえ、作品の歴史の一部になってしまう。

イタリア、スペイン、フランスなどの国は、文化財が自分たちの観光資源だと自覚しているので、修復に非常に力を注ぐ。日本人として悲しいことだが、ルーヴル美術館やウフィツィ美術館の年間予算だけで、日本の文化庁をしのぐ規模の予算を保存修復に投下している。

チェーザレ・ブランディ著『修復の理論』によれば、「修復は美術作品の“潜在的な統一性”(ウニタ・ポテンツィアーレ)を回復することを目的とする。間違っではないのは、それは必ずしも“制作直後の状態”(ウニタ・オリジナーレ)を意味するとはかぎらない点である。」

具体例で考えてみよう。フリードリヒ二世の建てたカステル・デル・モンテは、美しく修復されているが、他所から運んできた大理石が修復に用いられている。以前になされた修復なのでさほど問題にはならなかったが、今ならちょっと問題になったかもしれない。ひどいケースになると、たとえばロッカザーレという小さな城塞で行われた修復のような例がある。断片的に残り、危険な状態にあった城壁を、それぞれ独立させて綺麗にしたため、本来繋がっていた状態をまったく想像できなくなってしまった点で、修復前よりもひどくなった。一方、なぜか議論を呼んでいない例としては、ヴェネツィアのサン・マルコ広場のカンパニーレ（鐘楼）がある。実はこの塔、1902年に一回崩れて修復・再建されているが、ヴェネツィア人はこれを決して「古いものではなくなった」とは言わない。それほどこの塔は、町の重要なシンボルとなっているからだ。

修復の例はいろいろあるが、どこまで戻すかは難しい問題である。《ミロのヴィーナス》の場合、もとの形がある程度推測されているのに、誰も「もとに戻そう」とは言わない。むしろ「手がないから美しい」ということさえできる。ところが同じルーヴルにあって1875年出土の《ニケ》についてはそうでない。像が発見された時、じつは左の翼しかなく胸も右側しかなかった。今ある像の右の翼は、左の翼をもとに反転して作られたもので、胸の部分は推測で作られている。しかし「付け足した部分を取り除け」という議論は起こらない。これが許される合理的理由はなく、単に修復された時期が古かったというだけのこともかもしれない。ついでながら、より正確には、ニケ像では右の翼は今より上方に跳ね上がっているべきである。

最近の修復でおおいに議論を呼んだのは《サルバトール・ムンディ》である。レオナルド・ダ・ヴィンチ作ということで、508億円もの高値がついたため、議論が巻き起こっても当然で、「レオナルド風に見せるために意図的になされた修復だ」との批判まで出た。難しい問題だが、この件については、修復家ダイアン・モデスティーニご本人に取材した番組や書籍も今後出るので、ぜひご覧いただきたい。

さらにここで、パラゴーネ（絵画と彫刻の優劣比較）の議論を加えて考えていきたい。レオナルドとミケランジェロが対立したという逸話には、パラゴーネの構図が重ねられている。パラゴーネについては、ベネディット・ヴァルキによるメディチ家のアカデミアでの講義が残っている。彫刻家と画家はそれぞれ自分の芸術が上だと主張する。ロレンツォ・ロットが立体感を強調して描いた肖像画やティツィアーノの《スキアヴォーネ》は絵画の優位性を主張するものであり、さらにはここに「色彩と筆触のヴェネツィア派」と「線と素描のフィレンツェ派」の対立が加わる。当時の美術史家ヴァザーリは後者の素描術すなわちディセーニョを重んじ、結果的に色よりも形が重視されることになって、後世の美術界に影響を与えている。

もう一つ重要なのが、ゼウクシス伝説をめぐる論争である。中世芸術では、画家は与えられた聖なるイメージをそのまま写すだけで、自身の個性を加えてはならない。一方、完璧な美女ヘレネーの絵を描くために5人の妙齡の女性を集め、それぞれの最も美しいところを選んで絵にしたという古代の画家ゼウクシスの伝説が、ルネサンス期に紹介されて画家たちによく知られた。自然は神が創ったものだから完全だとのキリスト教本来の思想から、欠損した自然の中から芸術家が断片を拾い集めてより美しい作品を再構成するという芸術観へと次第に変わって行く。その「再構成する技術と能力」こそが「ディセーニョ」であり、ついには画家は不遜にも、自然を凌駕すべきとまで言われるようになる。

この理念をもとにした実践例のひとつが「画家は本物の金を用いるのではなく、金を模倣すべきである」との考えであり、その好例がジョヴァンニ・ベッリーニの《ロレダンの肖像》である。一方ラファエッロは、美しい女をゼウクシスの方法で描こうとしても、現実には美しい女が欠けているので、「自分の心に浮かぶアイデア」を使ったと言う。神が創った自然よりも自らのアイデアのほうが美しい、とまで言っているわけだ。レオナルドに至ると、「この技（ディセーニョ）により私たちは神の孫（ニポーテ・ア・ディオ）というべきものとなる」とまで言ってしまう。すなわち、自然の再創造行為をするのだから、自分たちも一種の創造主にほかならないとの考えなのだ。このように、ルネサンス後期の画家たちに至って、それまでの価値観と大きく変わってしまったことがわかると思う。

最後に、木の文化（日本）と石の文化（ヨーロッパ）の違いについても考えてみたい。

興味深いことに、材料に木を選択することで芸術作品の定義も変わる。例えば伊勢神宮は20年毎の式年遷都で建て替えられ、建立当初からの部材は一つも残っていないが、形状・図案（デザイン）が宮大工の技術によって継承されているので、我々はそれを「古いもの」と考える。一方ヨーロッパでは、例えばコロッセオの場合、中世期に教会の建築資材のために5分の3ほどの外壁が失われた。建立当初の形状・デザインもわかっているし、材料の石を切り出した採石場もわかっているので、同じ組成の大理石で欠損部分を補うことも可能なはずだ。しかし、そのような方法で欠損部分を補ってしまうと、イタリア人はそこにオリジナリティを認めないのだ。

興味深いことに、つまり日本の例では、我々がオリジナリティを認めているものであっても、実際に物理的にはすべて置き換わっている。ところがヨーロッパでは物理的に変わってしまえばアウトである。これは木の文化と石の文化のそれぞれの宿命にほかならない。『修復の理論』の著者ブランディは、いかにも西洋人らしく「物質が外観としてイメージの表出を直接担っている場合には、物質の交換は効かない」（修復の第二原則）と明言している。日本の例はこの原則に背く形になるが、向こうでは固く守られ、誰もコロッセオの欠損部分を補填しろとは言わない。つまり、ヨーロッパでは「オリジナリティは素材に宿る」と考え、日本では「オリジナリティは図案に宿る」と考えているのである。

高温多湿な日本が木を主たる建築部材としたように、オリジナリティの定義はつまり風土によって決定されるのだ。言い換えれば、作品の定義は一定ではない。そのためにも修

復は常に議論の対象となり、先述したように歴史的要素を考慮しなければならず、「どこまで戻れば良いのか」との議論を生む。その際に我々が考えなければならないのは、制作者だけを創り手と考えるのではなく、受容者の頭の中で再構成される段階をも創造行為として認める必要があるということなのだ。

